

氏 名	安東 智香
学 位 の 種 類	博士（美術）
学 位 記 番 号	第 85 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	螺鈿ー記憶のフィルターー
審 査 委 員	主査 教授 栗本 夏樹 教授 吉田 雅子 教授 伊東 徹夫 准教授 安井 友幸 准教授 日下部 雅生

論 文 の 要 旨

螺鈿の光と色彩は私を魅了してやまず、私の作品構想の基となっている。螺鈿や貝を美しい、力がある、と感じるのは私だけでなく、誰しものが持つ感覚である。人を魅了する「螺鈿の光と色彩とは何か」という問いが、本論文を考察する契機となった。そして制作、考察を続ける中で見えてきた「螺鈿の光と色」と「記憶」との繋がりをキーワードにして本論を進めることにした。

第 1 章では、「貝と人間の繋がり」を文化人類学の面から見、なぜ人は貝に魅了されるのか考察した。貝は食料や生活の道具として使用される他、さまざまな立場の人に所有され、象徴とされてきた。形の均一さから財宝として、色彩や光から儀式の祭具として、また権力を知らしめるものとしてなど、用いられ方も多様である。そしてその見た目から、女性生殖器とイメージを重ね合わせられ、性的シンボルともなり、神聖なものとして扱われることもあった。それはある地域に限ったことではなく、世界中で見られる現象である。人が貝に抱く感情はさまざまであるが、形・色彩・光など、貝は人間が求めている力や願望などの対象となるのに十分な要素を兼ね備えていた。長い人間と貝の繋がりの中で、貝の光や色は人間の記憶の中に残っているのではないかと思われる。

第 2 章では、貝の成分、成長線と年輪、殻体構造、生育環境など、生態学の側面から貝を見、人を魅了する貝の光がどう作られていくのかを考察した。貝殻の形・色・文様・その放つ光は多様である。貝殻の成長に伴う縞模様は、螺鈿細工の魅力の一つである美しい流線型の模様となって現れる。螺鈿細工に使用される真珠層を持つ貝は、結晶構造が真珠と同じで並行に美しく並んでいる。同じ種類なのに、生育環境によって色が多様に違うこと、それらのことを理解した上で制作を進めると、より自身の作品に適した螺鈿の選び方ができると感じられた。

第 3 章では、「光」について考察した。螺鈿の最大の特徴は光である。人を魅了する光とは何なのか、幅広い面から人と光の関わりを考察することで、人間が光に惹かれる理由、螺鈿に惹かれる理由が見えてくる。人は自然の光なくしては生きていけず、その光が視覚から脳に伝達され、体調

を管理し、様々な感情を喚起させる。そして色は光が具現化したものであり、色も光と同様心理的・身体的に作用し、様々な感情を喚起させる。自然光には安定性があるが、人工光は生物の活動を低下させ、バランスを崩す。自然光の重要性を強く感じる結果となった。

第4章では、自身の作品のテーマである「記憶」について考察した。科学的に解明されている脳の記憶のシステムなどを整理し、フラッシュバック、赤ん坊の記憶、無意識の記憶などに、自身の体験などを当てはめて考察することにより、自身の中に眠る記憶が一体どういったものであったのかを客観的に捉える事を試みた。様々な体験は記憶として脳にしまわれ、そして外部からの様々な刺激によって引き出される。私達の感情や好みなどは記憶が大きく影響している。脳には可塑性があり、外界に反応しながら変容し、人は前へ進む為に記憶の書き換え、組み替えを行っている。脳の可塑性を知ったことは自身に希望を与え、作品の主題を記憶との対峙に絞り込む契機となった。

第5章では、漆芸における「螺鈿」について整理した。螺鈿は漆芸以外の工芸でも使用されているが、漆と合わせることで、薄貝技法などが大きく発展した。ここでは歴史的流れ、素材の特性をまとめ、技法においては伏せ彩色を主に取り上げた。私の制作は螺鈿に記憶に関する品々を封入するという形を取っているが、これは螺鈿の透過性を利用した一種の伏せ彩色とも言える。そして現代になり開発された、私の制作に欠かせない螺鈿シートの特性についても整理した。螺鈿シートは、小さな貝を樹脂で繋ぎ合わす事により、大きな一枚の螺鈿の面を作ることができる。このシートが開発されたことにより、螺鈿の表現の幅が大きく広がった。

第6章では、漆芸作家と螺鈿の関わりについて考察した。ここで取り上げた4名は螺鈿表現に特徴を持つ作家である。黒田辰秋の螺鈿を貼り詰める表現は、貝の持つ原始的な美しさや力強さを感じさせる。「螺鈿」の重要無形文化財保持者でもある北村昭斎は、伝統技法に独自の技法を加え作品展開をしている。サンドブラストを使用した技法では螺鈿は柔らかな光を放つ。服部峻昇は、蒔絵と螺鈿を大胆に融合させ、螺鈿と共に具体的なモチーフなどを蒔絵で表現しており、人の手で作り上げられた眩い美しさを感じる。韓国の漆芸作家の金キボクは、韓国螺鈿の伝統技法である細く裁断した螺鈿の薄板を用いて、文様を形成する素材としてではなく、光を表すものとして、螺鈿を作品に使用している。このように従来の技法に加え、作家それぞれが独自の表現を求め、現在まで螺鈿は多様に発展してきた。

第7章では、現在私が制作テーマに行きつくまでに制作した作品を分類し、自身の作品と螺鈿の関わりについて考察した。私は螺鈿の中にさまざまなイメージを感じ、作品を制作してきた。今までの制作を振り返ることにより、自身の作品において、螺鈿の光と色彩が作品の主軸となっていたことを確認した。そしてその光と色彩に、私の中に刻まれている根源的な記憶を込めていることに気が付いた。作品はいくつかの種類に分類されるが、自然への記憶、原始的記憶、ルーツの記憶など、人間の記憶といえるものを螺鈿の光に込めている。記憶と螺鈿の繋がり、これが私の制作テーマの核となっている。

第8章では、現在の自身の制作テーマである「記憶」に関する作品を取り上げた。私は作品の中に、記憶を喚起させる品々を使用している。その形状に螺鈿を貼る、螺鈿に封入する、螺鈿に透過させるなどし、それらの見え方を変化させている。様々な見え方を通して、それらの品々と私の関係、鑑賞者との関係を変化させる螺鈿を「フィルター」と位置づけ、そこで喚起される記憶に対して螺鈿がどのようなフィルターとして作用しているかを、3つに分類した。

第1の「光を纏わせるフィルター」の作品群では、輝いて見えた感覚や記憶の世界を、記憶を喚起させる品々に螺鈿の光のフィルターをかけて再現した。こうすると、その形状そのものが光輝き、記憶のイメージに近くなる。実際に当時そのものが光っていた訳ではないが、自身のその記憶のイメージは光輝いていた。それらをそのまま目の前に置くより、螺鈿のフィルターをかけた方が、原初の記憶を鮮やかに蘇らせることができる。

第2の「記憶を留めるフィルター」の作品群では、厚貝の積層を利用し、削り出した厚貝の層へ記憶を喚起させる品々を封入した。螺鈿の透明なフィルターをかけ封じ込め、忘れたくない記憶を目に見える形で永遠化した。

第3の「記憶と向き合うフィルター」の作品群では、記憶として残したいし意識もしたいが、そのままでは存在が強すぎる記憶の素材に、螺鈿の薄いフィルターをかけた。こうすると、封入したものが全て見えなくなるのではなく、見る角度によって柔らかく中が見えるようになる。自身と記憶の素材に距離を置く事ができ、記憶と向き合っ対話し、それを昇華させていく事が可能になった。このようにして螺鈿のフィルターをかけ替えることにより、様々な記憶を喚起し、変換し、それに向き合うという作用を持たせることができた。

私は光を放つという役割だけのために螺鈿を使用するのではない。透過させる、見えにくくするという螺鈿の性質を利用し、記憶を喚起させ、変換するフィルターとしての役割を螺鈿に持たせている。漆芸において写真など様々なモチーフを螺鈿で透過させるという例は希有で、これは私が記憶をテーマに制作と向き合った中で生まれた表現である。

現在私が螺鈿に感じている感覚は、人間の歴史、漆の歴史、過去の私、現在の私が混ざり合った私独自のものであり、その感覚を作品に表現出来るのも私だけである。ここから先、また新たな経験を重ねて行くことで、私の中の螺鈿の持つ意味も変わっていく。その変化を見つめながら、私独自の表現を模索していこうと思う。

審査結果の要旨

漆の加飾技法である螺鈿に魅かれ、それを用いた漆作品を多く手掛けてきた安東氏は、自分にとって螺鈿とはいったい何なのかを考えることから博士課程での研究を始めた。氏は、自身が螺鈿に強く魅かれる理由として、螺鈿の光る要素と色彩があると分析している。そして螺鈿の光には、他の素材には無い、様々な感情を想起させるちからがあると述べている。そして、その様々な感情と深くかかわっているのは「記憶」ではないかと考えるようになった。その気づきをきっかけとして、氏は漆と螺鈿技法による「記憶」をテーマにした制作を始めることになった。

博士課程本審査における作品展示では、博士課程で取り組んだ作品の中から論文内容とよく対応する作品11点を選んで、作品の変遷をたどるように展示された。

安東氏は、作品の中に、記憶を喚起させる具体的モチーフを使用している。その具体的モチーフの表面に螺鈿を貼ったり、モチーフを螺鈿に封入したり、モチーフを螺鈿に透過させたりして、記憶を喚起させるモチーフの見え方を変化させている。氏は、様々なモチーフと鑑賞者との関係を変化させる螺鈿を「フィルター」と位置づけ、モチーフによって喚起される記憶に対して螺鈿がどのようなフィルターとして作用しているかを3つに分類している。

第1は、「光を纏わせるフィルター」の作品群である。審査作品中では、「すべてたからものだった」2015年、「光の糸」2015年、「Future」2012年、「feminine」2010年、そのグループに該当する。これらの作品では、輝いて見えた感覚や記憶の世界を具体的なモチーフの形状に螺鈿の光のフィルターをかけて再現している。螺鈿のフィルターをかけることで原初の記憶を鮮やかに蘇らせることに成功している。

第2は、「留めるフィルター」の作品群である。審査作品中では、「遠い日の歌」2014年、「一節に重なる それだけでいい」2015年、そのグループに該当する。これらの作品では、厚貝の積層を利用し、削り出した厚貝の層へ記憶に関する具体的なモチーフを封入している。モチーフに螺鈿という透明なフィルターをかけて封じ込め、忘れたくない記憶を目に見える形で永遠化することを目指している。

第3は、「向き合うフィルター」の作品群である。審査作品中では、「harumoni」2015年、「Memory of that day」2012年、「おにいちゃんはおお わたしはあか おとうとはみどり」2014年、「retroscope」2010年、「home」2010年、そのグループに該当する。そのままでは刺激が強すぎる記憶を含んだモチーフに、螺鈿の薄いフィルターをかけることで、モチーフに距離を置く事ができるようにした作品である。そのことにより、記憶と向き合って対話し、それを昇華させることが可能になった。

審査教員からは次のような意見が述べられた。

- ① 第1章から第3章における螺鈿に対する科学的な考察と、第4章における記憶に対する科学的な考察は、氏自身の制作における螺鈿の使用に客観性を持たせるだけでなく、螺鈿を使用した表現の展開に広がりや深さを与えた。

- ② 氏の作品の変遷は、一作一作に考察と更新が繰り返されており、コンセプトを追求する制作姿勢としては理想的な展開である。またセルフポートレートが丁寧に組み込まれた作品には、密度と奥行きに説得力があり好感が持てる。
- ③ 記憶を呼び起すものとしての螺鈿の透過性を使った技法は他に類を見ないものである。多くの鑑賞者が見ても記憶の中にある何かを呼び覚ますことや、記憶を再構築することにより、マイナスの記憶をプラスに変換できるような内容に今後より発展出来れば、漆芸及び螺鈿の新たな表現方法としてのみならず、芸術が社会的に及ぼす価値ある内容となるのではないかと考える。
- ④ 氏は自身の民族的ルーツについて絶えず深く考えなければならない人生を送ってきたようである。論文の最後に書いているように、「この論文を作成することによって、記憶と対峙し前に進んで行けると考えられるようになった。」と述べている。博士課程において、自分を見つめて作品化し論文を書く、そしてそれを客観的に考察しようと努力する試みを続けてきたのであり、その結果、優れた成果をあげたと評価できる。
- ⑤ この論文は前半で主要要素が客観的に整理され、後半の作品論において前半の要素が巧みに援用されて、明確な論旨をもって展開されている。

以上の意見をまとめると、安東氏の研究は、論文での考察と制作の相互作用がうまく機能し、内容ある作品と論文に仕上がっている。また、記憶を呼び起すものとしての螺鈿の透過性を使った技法は他に類を見ないものであり、その点も高く評価された。自身の内面と技法と素材に対する考察を十分深めることができたことで、今後、安東氏の表現がさらに飛躍する可能性を感じさせる。本審査結果としては、審査員全員一致で、安東智香氏の博士（後期）課程 本審査を合格と判定する。